

**岩**

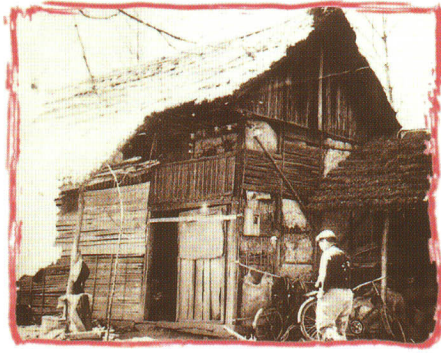
瀬・西白河地方の東部に広がる矢吹が原。平坦な地であるにもかかわらず隈戸川、釈迦堂川などの河川は河床が低いため、水流を眺めるだけで農業などに利用することはできませんでした。ここに暮らす人々にとって、農業用水の確保は最大の課題であり、永い間の宿願でもあったのです。

**明**

治時代になってから、政府の土族授産のための本格的な開墾が始まり、矢吹が原の十軒原に二戸、八幡原に三戸の土族が入植しました。また、矢吹が原には御料地があったため、明治十三年には宮内庁開墾所が六軒原（鏡石町）に開設され、独自に開墾が進められることになりましたが、用水の不足などでも思うように進みませんでした。明治十八年と三十年には大和久村の星吉右衛門が矢吹が原への

疎水計画を国に陳情しましたが、実現には至りませんでした。

ようやく矢吹が原の開墾事業が具体化したのは、昭和九年に矢吹が原御料地の払い下げが決



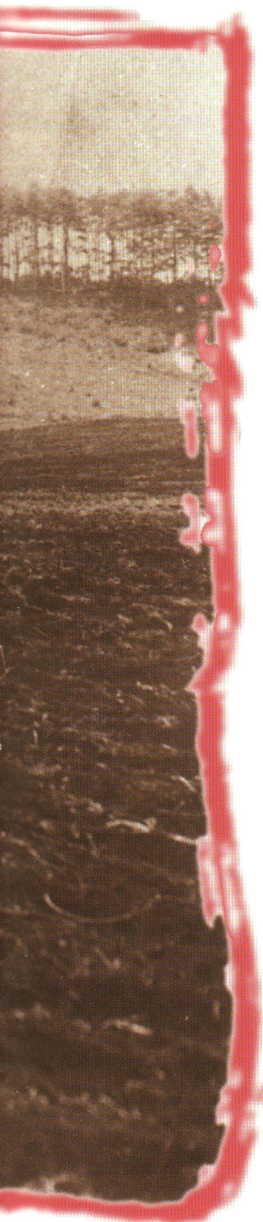
飛行場跡に入植した当時の家（昭和35年頃）

定した後でした。昭和十一年に矢吹が原開墾事業所、昭和十六年に農林省矢吹原国営開墾事務所が設置され、本格的な国営開墾事業がスタートしました。しかし、太平洋戦争の勃発、敗戦によって事業はまたも一時中止を

**昭和31年、ついに完成した羽鳥ダムは、荒涼とした原野であった矢吹が原を豊かな田園地帯に変え、そこに暮らす人々の生活に潤いと豊かさを運びました。**



和牛の導入（昭和13年頃）



開墾のなった畑へ種を播く人々（昭和12年頃）